

現地を訪問して想うこと

小野 弘賀 (1981・法、1987・経済)

大阪府在住で、立命館大学では二部法学部・二部経済学部の2学部で合わせて10年間お世話になりました。

今回、校友会の募集で東北復興支援の取組みを知って、東北で震災後3年が経過してどうなっているのか。テレビのド・キュメンタリー番組などを観るが、復興が進んでいるようには感じられないし行ってみたい、どうせ外れるだろうと思いながら応募したのです。

台風19号の接近で、ツアー自体が中止になるのではないかと、不安を抱えながら仙台へと出発しました。

仙台まで行く計画を立てた時に、JR常磐線はまだ不通でJR在来線での仙台入りは難しいこともわかりました。

三陸鉄道が復活していたので、鉄道関係は全て元とおりと錯覚していました。

仙台に到着後、バスの中で宮城県校友会通信が配布されて、聞き覚えがある南三陸町防災対策庁舎で最後まで避難を呼び掛けて亡くなられた方の話が掲載されていました。

2人の若い男女の職員と上司の方の3人が、マイクで避難を呼び掛けている3人の切羽詰まった状況の会話が全てマイクを通じて、逃げる方々の耳に入っていたことが掲載されていました。

私はその記事を見て、3人の方がどんなに不安の中で逃げ出すこともなく、殉職されたかと思うと、涙があふれてきました。

5月末に娘が嫁ぎ、涙線が緩みすぎたのでしょうか、3人のご冥福をお祈りするばかりです。

勉強会では、校友の佐々木夫妻の会社の建て直しの話があり、ご主人である社長が段々と会社の再興の話を一聞いていたのですが、最後に奥さんが決して楽な道りではなかったことを話された時、それはそうだ、2回も助成申請に外れ、金融機関からも助力を得られず再興を諦めかけたのですから。その時のお二人の絶望感を思うと、容易な道りではなかったことが解り、また涙が。

勉強会では、地震のあと津波や高潮を警戒すべき土地では、自分の身の安全を第一にして、一度安全な所に逃れたら決して家族等を探しに戻ってはならない。戻られた方の多くは、帰ってこられなかったそうです。

3年前の震災では、安全なところへ避難した方が家族を捜しに戻られた方が多数方おられて、犠牲となられたことが強く印象に残りました。

仙台空港付近にあった大学ボート部では、全員助かづたという事例を。

部員の中に三陸町出身者がおり、地震後、直ちに高所への移動を果たしたからだとのことでした。

その子は、小さい時から大きな地震のあとは必ず津波が来るから、何もかもほっぽり出し

でも、高台を目指して逃げろと教えられていたそうです。

そうした体験談を聞かせていただいた翌日は、いろいろな名所と立ち直りつつある笹かまぼこの会社ささ圭さんへ寄せていただきました。

おいしいかまぼこの試食にあずかり、買い物も済ませ一同記念写真。

その後です。校友の佐々木夫妻を皆で取り囲んでの立命館大学の応援コール。

「フ～レ～、フ～レ～、さ～さ～け～い…」夫妻も泣いておられるし、私の臉も涙で画像がぼやけて見えませんでした。

(エールで良いかと、60前のこの歳になって初めてわかりました。)

台風にも影響されず、仙台の2日間は快晴で過ごすことができました。

しかし視察した石巻では、私がおすい(汚水)蓋のマンホールがあるのに、うすい(雨水)蓋のマンホールが見つけれられず心配していたとおり、近畿を直撃した台風が東北で被害を与え、ニュースで見覚えのある石巻の町が浸水しているところを見せつけられました。

そもそも新しい建物はあるものの、まばらなのでそのため道路整備が遅れ、道路排水整備等も遅れているのではないかと思いました。

被害にあわれた石巻の人々には、度重なる自然災害に頑張っていたきたいと心の底から思います。

復興など、まだまだ途上です。そのことを、私は自分の近くの人へ伝達していくつもりです。

石巻がんばれ、東北がんばれ！

終話